

「自分と同じわけもんに向けて」

小林市 鷗野 雅志

私は、今年より小林市役所に勤め始めた社会人一年目のわけもんです。

私の勤める市役所は、教育、農業、福祉など様々な分野の部署が存在しており、学校の設備の充実、農家の方々への支援、介護の必要な方への相談窓口等、様々な形で市民のために取り組んでおります。

こうした市役所の業務をはじめ、国や県の方針の決定は、一人一人の票による選挙の結果がベースとなっています。一票の積み重ねが政治の方向性を決め、私たちの生活に影響をもたらすのです。

しかし、近年、投票率は低下しており、中でも若者の投票率の低さが問題となっています。

先日ありました宮崎県知事選挙では、選挙事務のため投票所にいました。選挙に来るのは高齢者が多く、段差を上るのもやっとなの中投票所へ来られた方がいる一方で、自分と同じ年代の若者の投票が少なく、少子高齢化の影響を考慮しても若者の政治離れが深刻であることを実感しました。

若者が選挙に行かないのはなぜでしょうか。政治についてわからない。興味がない。忙しい。理由は様々かもしれませんが、やはり自分の一票では何も変わらない。という意識が根底にはあるのではないかと考えます。

大学時代に選挙に関する興味深い講義を聴く機会がありました。教授は学生に対して「あなたは立候補者です。選挙の公約を1つだけあげるとして、当選するために、どのような政策をあげますか」と問いました。学生は子育て支援や観光施設の充実など各々公約をあげる中、教授の回答は「私は医療・介護関連のものにします。なぜなら一番票を入れるのは高齢者なのだから。」というものでした。極端な話ではありますが、非常に考えさせられるものでした。

少子高齢化が進み、高齢者への支援は必要不可欠となっています。しかし、報道でも取り上げられるように若者の生活は決して豊かではありません。選挙に行く高齢者と行かない若者、政治に関心の高い高齢者の方に政策が寄ってしまうのだらうと思います。そう考えると若者の投票率をあげることは、若者を意識した政治を求めているというわけもんの主張となりうるのではないのでしょうか。若者の一票は当選者を決めるだけでなく、若者の意思を伝える大事な一票だと考えます。

私は 21 歳の時初めて選挙へ行きました。日頃目に入ったテレビのニュースを見るにとどまっていた私は、日本がどのような政治を行い、抱える問題についてどう政策を打ち出しているのか全く考えていませんでした。そのため自分の一票を誰に入れるか考えたとき普段いかに政治に関心がないのかわかりました。意義のある投票にするため、各政党の公約等を様々な媒体で調べました。各政党による日本の抱える問題に対する考えや政策について知ることによって自分の納得した一票を投じることができました。選挙を一つのきっかけにして、政治や世の中のことを考えることもまた、大きな意味があることだと思います。

私は、自分が育った小林市が好きです。小林市で育った若者が地元に戻ってこられる若者の住みやすいまちにしたいです。皆さん自分の生活や暮らすまちに対して、要望や願いがそれぞれあることと思います。選挙で投票することは政治に対してその意思を伝える一つの手段です。皆さんも日頃の暮らしに対する思いを投票で形にしてみませんか。